

2020年8月23日 説教「御霊と知恵に満ちた人」

創世記 41 章 37～45 節

パロに呼び出されたヨセフは夢の解き明かしをしたうえで、エジプトの国の将来まで考えて、パロに提言しました。

1. あなた以外にはいない (37～39 節)

①パロ等の心にかない (37)「このことは、パロとすべての家臣たちの心になかった。」夢の解き明かしの内容は、まずは七年の豊作があり、その後七年の飢饉がやってくるというものでした。「飢饉が地を荒れさせ」というほどに、ひどい状態になるということです。それだけに対策をし、しっかりと備えなければならないとヨセフは言うのです。そして、その難局に対応するためには、知恵ある人を指導者に立てなければならないことを訴えました。その提言は、パロはもちろんその家臣たちも納得するところでした。

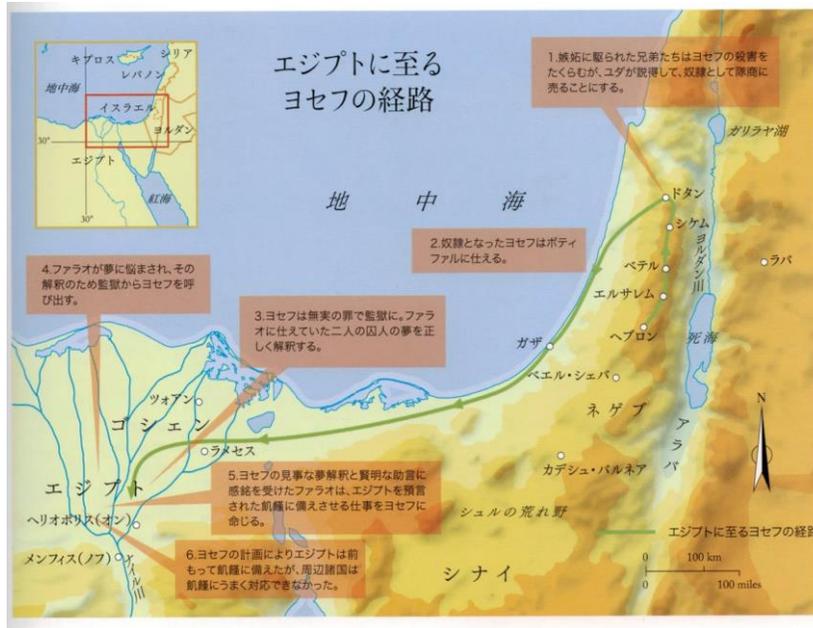
②神の霊を宿す人 (38)「そこで、パロは家臣たちに言った。『神の霊の宿っているこのような人を、ほかに見つけることができようか。』」パロはエジプトの王ですから、ヨセフのあがめる創造主なる神のことは知らなかったでしょう。しかし、ヨセフが自らの夢を明らかにしたことから、ヨセフの背後にいます神の力を感じたのででしょう。そして、ヨセフはその神の霊を宿らせている器であると認識したのです。

③知恵のある者 (39)「パロはヨセフに言った。『神がこれらすべてのことをあなたに知らされたのであれば、あなたのように、さとして知恵のある者はほかにいない。』」パロはヨセフを導いている神に敬意を払っています。それは、ヨセフにあれほどの大いなる力を与えておられると考えたからです。そして、その神がヨセフにこれほどのことをなさっているなら、彼ほどの知恵者は他に見当たらないと考えたのです。

2. エジプトの総理大臣に (40～42 節)

①私の家を治めてくれ(40)「あなたは私の家を治めてくれ。私の民はみな、あなたの命令に従おう。私があなたにまさっているのは王位だけだ。」パロが「私の家」というのは、エジプトの国のことです。パロから、エジプトを治めてくれ、とヨセフは請われたのです。民をヨセフに従わせるということです。パロは王の地位は別にして、国の政治についてはヨセフに任せました。世々の王たちは、絶対的権力者として、政治のトップに立ち、命令を下し、国を動かしてきたわけですが、パロは政治的部分についてはヨセフに任せると述べているのです。この地位は総理大臣以外のなにもものでもありません。

②エジプト全土を (41)「パロはなおヨセフに言った。『さあ、私はあなたにエジプト全土を支配させよう。』」パロには夢の解き明かしたヨセフ以外に、これからの難局を任せられる人はいないと思いました。それは



ヨセフの人格全体に漲る確信、聖潔さ、風格にもよったことでしょう。この国の浮沈はこの男にかかっていると確信したのです。ヨセフに、治世を任せることこそが、この国を守る道であると思ったのです。そして、当面のエジプトの政治をヨセフに委ねようとしたのです。

③指輪をヨセフの手に (42)「**そこで、パロは自分の指輪を手からはずして、それをヨセフの手にはめ、亜麻布の衣服を着せ、その首に金の首飾りをかけた。**」パロの印が刻まれた自らの指輪をヨセフの手にはめる、ということは、これまでの言葉が口先ではないことを示します。亜麻布の服も特別職に就く者が着るにふさわしいものです。首にかける金の飾りも、大臣職になる者に相応しいしるしでした。

3. エジプトの統治者として (43~45 節)

①第二の車に (43)「**そして、自分の第二の車に彼を乗せた。そこで人々は彼の前で、『ひざまづけ』と叫んだ。こうして彼にエジプト全土を支配させた。**」パロが乗る車が第一なら、ヨセフが乗る車は第二。人がひざまづくのはどういう時でしょう。自分とよりはるかに地位が高い王のような人の前に出ることでしょう。「主の前にひざまづく」(詩篇 95:6) とありますが、私たちがひざまづくべき唯一の方は、主なる神です。ヨセフにとっても、それは同じでした。しかし今、ヨセフはエジプトにあって、人々がひざまづくほどに、敬愛を払われる政治的地位に着いたのです。

②あなたの許しなくしては (44)「**パロはヨセフに言った。『私はパロだ。しかし、あなたの許しなくしては、エジプト中で、だれも手足をあげることもできない。』**」パロは自らが主権者であることを宣言しました。その上で、ヨセフの許可なしに、エジプトの政治、経済が動くことがないと伝えています。要するにヨセフには、実際の政策立案や行政をまかせると言っているのです。外国から来た若者にこれだけの権限移譲をするということは、普通ではありません。パロ自身が、大きな力に動かされていたといっても良いのでしょうか。

③あまねく知られ (45)「**パロはヨセフにツァフェナテ・パネアハという名を与え、オンの祭司ポティ・フェラの娘アセナテを彼の妻にした。こうしてヨセフはエジプトの地に知れ渡った。**」パロはヨセフにエジプト国流の名前を与えました。それはツァフェナテ・パネアであり、「神は語り、彼は生きる」という意味でした。その上で、彼には妻も与えられました。その女性はオンの祭司ポティ・フェラの娘アセナテでした。この祭司というのはイスラエルの神に仕える人ではありません。しかこの結婚は、ヨセフが安定的な政治を行うために必要でありました。そして、イスラエルの民がこの地に助けを求めにやってくるという、大きな出来事に至る道筋のためにも、家族を形成する必要があったのです。今や、ヨセフはエジプトにあまねく知られるようになりました。

《結論》ヨセフは兄たちから疎まれ、売られてエジプトの国にやってきました。買ってくれたポティファルの下に働き、重用されました。ところが、その妻の逆恨みから入獄され、獄中で会った献酌官長の夢の解き明かしをしましたが忘れられました。しかし、ついに時が来て、パロの前に出てその夢を解きました。その結果、パロからの絶大な信頼を得て、今朝の聖書箇所では、パロから総理大臣の任に当たらせられることになりました。

さて、こうしたヨセフの人生を外から見ていると、ある面ではわくわくします。しかし、これらの記事は決して、ヨセフの出世物語ではありません。ヨセフの信仰という視点でみていくことが大切です。パロは聖書の神は知りませんでした、「神の霊の宿っているこのような人は、ほかに見つけることができようか。」と述べています。ヨセフのうちに特別の力が宿されているとパロも認めているのです。それはアブラハム、イサク、ヤコブと受け継がれてきた、唯一真の神への信仰がもたらすものでした。

新約聖書の「使徒の働き」には、聖霊に満たされて働く使徒達の姿がえがかれています。エルサレムにキリスト信者が多く起こされていくなかで、毎日の配給問題が生じました。12 弟子達は自分たちが、祈りとみことばの奉仕に専念するために、こうした実際的な問題解決にあたる七人を選ぶことにしました。その時の選出条件は「御霊と知恵に満ちた評判の良い人」でした (6 章)。選ばれた者達の中には、ステパノもいました。彼はその直後に殉教しますが、十字架の主の犠牲を彷彿とさせるような出来事でした (7 章)。彼はまさに御霊に満たされた人でした。

ヨセフもそうでした。彼には神に従う信仰により、神の霊が宿っていたのです。「御霊に満たされなさい」(エペソ 5:18) という御言葉をステパノや、旧約時代のヨセフも体験していたと言って良いでしょう。それでは御霊に満たされるとはどういうことでしょうか。満たすとは「人の思いを全く支配してしまうこと」です。「御霊に満たされなさい」とは聖霊の影響下にありなさいということです。私たちの全人格 (知性、感情、意志) が聖霊の力の支配にあるということです。それは、「あなたが関心のある事柄や人のことで思いがいっぱいになるように、聖霊でいっぱいになりなさい」(ジョン・ストット) ということです。ヨセフも絶えず神のことを意識しつつ生きようとしていたのです。

私たちが教会の働きをするにせよ、世の中での働きをするにせよ、家庭での仕事をするにせよ、信仰により、御霊に導かれて生きていきたいのです。仕事の知識、知恵、能力が大切なことは確かですが、それらは必要に応じて備えられていきます。忘れてならないことは、仕事を支える御霊なる神に支配されていくことです。悩み多き者たちに必要なのは、生きて働かれる御霊なる神を求め、愛と希望をいただき、信仰をもって

歩むことです。そこに、大いなる道が開かれてくるのです。そのことを、今朝のヨセフの出来事は示しています。ヨセフの人生に学び、主イエス・キリストをあがめ、御霊に導かれ、支配され、知恵を与えられて歩いていきましょう。